

## 西鶴の武人形象にみる歴史認識

——その敗將溢美の方法をめぐって（上）——

森 田 雅 也

### 一、はじめに

西鶴作品の分析において、そこに描かれている文学世界を今に至る普遍的な本質論から解明することは一つの方法である。また、西鶴と同時代の環境から読み解くことも必要不可欠な分析方法である。私自身、どちらの学的立場も歩んできたと認識している。

しかし、本稿では、西鶴の歴史認識が現代の我々の歴史認識から逸脱しているのではないかと疑義を呈しつつ、じつはこれを西鶴のある創作方法と見なすなら、むしろ同時代の環境に即した歴史認識ではないかというテーゼを提出しようとしている。

このテーゼは歴史認識であるため、あまりに形而上の問題で、判然と西鶴作品の本質を規定しているとも限らないのではないかという駁撃を甘受しなくてはいけない。

それでは全くこれが無為な作業かと言えば、純粹な音の構築物として存在する絶対音楽に対し、標題音楽と名付け

られる作品から、その観念や表象を洗い出す作業に似ていると考えている。むしろ、西鶴作品の根底に関わる思想ではなからうか。

さて、その創作方法とは一言で言えば、「敗將溢美の方法」である。

西鶴研究史、特に『武家義理物語』論において、この滅び行く者の視点に立ったすぐれた論がある。源了圓氏は「西鶴が武家物に描く人物は、哀れに、そして美しい。西鶴は、歴史の舞台から去っていく、情けに生き情けに死ぬ戦国的な武士たちの挽歌をうたったのである」として武士の滅びの美学というべき説をあげている<sup>(1)</sup>。『武家義理物語』を敗者という視点から分析したのは篠原進氏の論である<sup>(2)</sup>。

武人が時に利あらず、たとえ、力は山を抜き気は世を覆えども、滅び去ることは歴史に往々として横たわっている。その武人たちを惜しめばこそ軍記物、実録、講談などが成立したのである。判官びいきもこの線上で説明ができるであらう。

ところが、ここで標題とした「敗將溢美の方法」は、些か意を異にする。西鶴のこの方法は一時代前の戦国期に実在した有名な敗將、あるいはその麾下の武將をあげて賞賛しているのである。あるいは褒めすぎといってもいいかもしれない。だから「敗將溢美」なのである。しかもそれらの敗將はただ戦に敗れただけでなく、主家あるいは同盟を破って裏切った人物として世相が認識している人々なのである。さらに裏切られた人物は天下布武の完成を目前として散った織田信長なのである。

それはなぜか。その解を西鶴の歴史意識に求めたのである。そのことを武人形象という面から検証し、当時の戦国時代認識まで押し広げて考察を行うのが、本稿の目的である。これらから得た結論はあくまで、西鶴の歴史意識への一見解でしかなるうが、試論としてお許しいただき、以下論をすすめたい。

## 二、溢美される浅井氏、浅井長政

戦国大名浅井氏は、浅井亮政、久政、長政と続く三代において、主家京極家、さらにその主筋六角家と攻防を繰り返し、家臣の身から北近江の大名となった、下克上の戦国時代を体現するような家柄であった<sup>③</sup>。『浅井三代記』に詳しい。以下、小瀬甫庵『信長記』、大田牛一『信長公記』などより大要を書けば、以下である。北近江の大名となつた浅井家は三代目浅井長政の時代には織田信長と同盟を結び、その妹お市を妻に迎え、浅井氏の全盛期を築くに至つた。しかし、浅井氏と古くから深い盟友関係にある朝倉氏が信長に攻められるに及んで、浅井久政、長政親子は信長との同盟は一方的に破棄し、朝倉義景の領地越前の深くまで攻め入つた織田徳川軍を背後から急襲する。元亀元(二五七〇)年のいわゆる「金ヶ崎崩れ」である。この窮地に九死に一生を得た信長は、この約半年後、「姉川の合戦」を行い、織田徳川軍は浅井朝倉軍を破つてしまふ。その後も浅井長政は浅井家の当主として、本願寺による包囲網作戦の一翼を担い、武田信玄軍の上洛にあわせるなどして織田信長の軍と戦うが、ついに天正元(二五七三)年居城小谷城を落とされ、妻お市を織田家に引き渡した後、自害して果てた。織田信長は天下布武の邪魔をされ、生死にかかわる窮地に陥れられ苦しめられた、朝倉義景、浅井久政、長政親子に容赦なかつたのであろう、新年の宴で、三人の頭蓋骨に金箔を塗り、それを飾つて酒宴を開いたという逸話は有名である。信長側からみれば、浅井長政は義兄を殺そうとした大罪人である。加えて浅井氏の戦の方法も、織田徳川軍の同盟軍として油断させておいて、朝倉軍を攻めている背後を襲い、示し合わせて袋のネズミにしようとするもので卑怯極まりない行為とならう。浅井長政は信長の家臣ではないから、逆臣とは言えないものの人道上、戦略上どちらの面からも浅井氏、特に義弟浅井長政は日本の歴史上、類い稀な裏切り者といえよう。その評価は現代の我々が衆目認めるのと言つて間違いないであろう。

ところが、この浅井氏が支配していた頃の近江の武家の話を、西鶴の『武家義理物語』〔貞享五（二六八）年刊〕では、全二十六話のうち二話も載せている。

まず、巻五の二「同じ子ながら捨てたり抱いたり」は以下のような話である。

江州姉川の合戦の時、両軍矢留の際に、落ちていく人影を織田側の遠見の役人が見つけて追いかけたところ、遅しき女であったが、追い詰められると懐の乳飲みである娘子を容赦なく捨てて、七歳ぐらいの男の子だけをつれて走って逃げようとする。捕らえて城主の子かと詮議すれば、男の子は下々の子。子細を聞けば、二人の子はともに養子で女の子は自分の姪で、男の子は夫の甥であった。女はもし、自分が命を落とした後、身びいきであったと言われるのが口惜しいために娘より息子を大切にしたと言うのであった。この女の心底に感じ入った役人は命を助け、脇道から落とさせた。

この本文の書き出しは

江州姉川合戦、永禄十二年六月二十九日に、敵味方暫く矢留めをして、疲れを晴らす時、陣小屋の片陰より、夕日の移りに、見る人の目を忍び、落ち行く面影、

とある。「永禄十二年」は前述の「元亀元年」のことであるから、間違いではない。「六月二十九日」も正確には「六月二十八日」として、訂正する注釈（『新編日本古典文学全集』、対訳西鶴全集等）は多い。なるほど「姉川の合戦」は「六月二十八日」とするのが正しい。

しかし、「姉川の合戦」の攻防の地にあつた要害「横山城」の兵は「六月二十八日」の姉川での平地戦に勝利した織田徳川軍の前に戦わずに降参し、敗走している<sup>(4)</sup>。『武家義理物語』のこの話は落城した際の事件であるので、「横

山城」攻防戦を広く「江州姉川合戦」と見れば、これほど正確な記述はない。

さりながら、『武家義理物語』の物語性からは「姉川の合戦」にせよ横山城落城にせよ、このような逸話があったとは考えにくい。むしろ、兵士に追い詰められて我が子を捨てた話については先学が指摘されるように『古列女伝』、仮名草子からの影響と考える方がよからう。

問題は「義理詰まれる心底」の持ち主の女主人公を浅井の側にしてあることである。女の夫は「竹橋甚九郎」という元武士で今は百姓をしていたが、この戦いで浅井側として駆り出されたとしている。女は夫が「二人の子を随分成人いたさせ、名跡を継がせよ」と戦死を覚悟した昨夜の言いつけを守ろうとしたため、仕方なく落ちのびようとしたと語っていることから百姓というより武家の妻の心底を持つ女として描かれている。本文にも落ちる際、「一つ刀を差して」として、その様は【挿絵Ⅰ】でもわかるように立派

な武人なのである。それが「たくまשיき女」と形象される以上、巴御前のような一騎当千の感まである。そのような立派な武人が浅井の領地には居たと賞賛しているのである。

『武家義理物語』巻一の一四「神の咎めの榎木屋敷」も「江州浅井殿の時」の話である。

江州小谷城下に立派な榎木があったが、そこは神社跡であったらしい。その土地を拝領して家を建てて住んだ者が怪奇現象のため体調を崩し、この屋敷を返上した。以来、誰が住んでも病死や患うため誰も住まなくなった。ある時、長浜金蔵という人が「い



【挿絵Ⅰ】

くら神社跡でも人には祟るまい」と榎木屋敷に移り住んだ。住むやいなや榎木を怪奇の根元と切り倒したが、神のお咎めはなかった。ある雨夜、金蔵の家来たちが集まり怪奇話をしている時に、小賢しい小坊主が雪隠に立った者を次々と古い靱でなでて怖がらせると逃げ帰っていた。これがおかしくその後も怖がらせていると、怪奇の風聞もたち、夜に雪隠に行く者がなくなつてしまった。やがてはその風聞を知らずに雪隠に立つ人に靱が勝手に悪戯をするようになった。金蔵はこの靱に引導をわたし、焼き捨てたところ、靱は火の中で狂いながら焼かれた。そののも金蔵はこの屋敷に住み、八十歳まで長寿を全うした。

西鶴はこの長浜金蔵という武士を

金蔵、人中の一言、その義理違へず、ここに済ましけるは、天晴武士の一心とぞ、世の人誉めにき。

と絶賛している。「人中の一言」とは榎木屋敷が化け物屋敷だと誰もが尻込みする様に

「いかな神社跡なればとて、人に崇り給ふ子細なし。それは住める人の愚かなるゆゑなり」と、世の人浅ましく申しぬ。

とその場にいた若侍の前で、金蔵が臆病者の愚か者と悪し様に言ったことを指している。金蔵を絶賛するのは、その「人中の一言」が大言壮語でなく、金蔵自らが体現して眼前に示したことへの絶賛である。いや、「天晴武士の一心」はそれ以上の賛辞かもしれない。

こんな立派な武人が浅井の武家屋敷には居たと賞賛しているのである。

『武家義理物語』の序文には「義理に身を果たせるは、至極のところ、古今その物語を聞き伝へて、その類をここに集むる物ならし」とある。西鶴が序文に示すところに従えば、本書は武士の徳目「義理」に身を捧げた最上の武士

の道に生きた人々の物語なのである。前述したように『武家義理物語』は全二十七章二十六話あり、それらがすべて諸国咄となっている。当時の読者たちは、武士ならずとも誠の武士の話はこの国が多いのか、大いに興味を持ったであろう。ところがあろうことか、江戸の話は一つもない。武辺を看板にする大名家の話もほとんどないのである。

にもかかわらず、『武家義理物語』には近江の国の話が三話もある。しかも二話は京極でも、六角でもなく、ただか五十年あるなしの浅井の治世なのである。

前述したように主家浅井家は裏切りの家。現在の歴史研究からは、織田信長が浅井の盟主朝倉義景を攻めないという約束を無視したことによる宣戦布告という見方もあるが確証を得られていないことを考えると、西鶴の当時の人々はむろん知らないことである。浅井の織田信長の朝倉攻めの背後をついたという行動が軍事行動として「裏切り」とは言わないにしても、浅井は義兄を奇襲した「義理なし」の家門と言えるであろう。西鶴は、その「義理なし」の家に、最も「義理」に身を捧げた誠の武士の道に生きた武徳を誉めたたえたのである。奇妙と言わざるを得ない。ともあれ、家臣の誉れは主君の誉れ。敗将浅井氏、浅井長政は溢美されているのである。

### 三、溢美される荒木村重の家臣

荒木村重は、天文四（一五三五）年、摂津国池田城主である池田家の家臣荒木信濃守義村の嫡男として池田に生まれた<sup>5)</sup>。主家池田家の当主池田勝正の家臣として仕えていたが、池田長正の娘を娶り一族衆となっている。池田勝正は上洛してきた織田信長の支配下となり、摂津守護の一人として活躍するが、元亀元（一五七〇）年、家臣荒木村重は三好家に寝返り池田勝正を追放し、池田城を牛耳っていく。その後、織田信長から三好家から織田家に移ることを許され、天正元（一五七三）年、茨木城主となっている。

戦国時代の常とは言いながら、荒木村重は主君池田勝正を裏切り、次の主君三好家（三好三人衆）を裏切り、織田信長に仕え、天正二（一五七四）年には伊丹城主となり、摂津一國を任されている。この時期、新参者ながら秀吉、光秀などと同様に織田信長軍の一軍を任されるにいたっているのである。

ところが、荒木村重は天正六（一五七八）年、毛利軍と秀吉軍攻防の上月城へ救援失敗の後、伊丹城に引き籠もってしまふ。すでに本願寺との盟約があつたと伝えられているが、織田信長に叛く村重の気配に明智光秀、松井有閑、秀吉、前野長康、蜂須賀小六らが説得するも翻意せず、秀吉が使者として送つた、村重と旧知の仲でもある黒田孝高を拘束し土牢に監禁してしまふ。その後、伊丹城で約一年の籠城戦を行うが、村重は落城前に城を抜け出ている。この落城後に織田信長の命によって村重の家族や部下数百人が、ことごとく見せしめとして惨殺された様は『信長公記』が記すとともに、語りぐさとなつている。

荒木村重は単身毛利氏を頼り安芸にのがれたが、これが三度目の裏切りである。村重はその後も生き延び、信長亡き後、堺に住み、茶道の道を極め、道糞、道董と号し、千利休の高弟、七哲の一人に数えられる茶人となり、秀吉が天下人となると、招かれて秀吉に仕え、一生を終えている。

主家を三度裏切り、部下や妻子を見殺しにした荒木村重のことを知らない者はいなかつたであろう。にもかかわらず、『武家義理物語』巻一の五「死なば同じ浪枕とや」には村重の家臣がこれぞ「義理」に生きた武士の鑑として形象されている。

荒木村重の家臣神崎式部親子は村重の次男の蝦夷見物にお供で東国へと下つた。降り続く雨で水かさが増して危険な川越えになるので家臣は留まることを進言したが若君は強行に渡ることを下知した。式部は国元を出るとき、同役の森岡丹後から



一子丹三郎のことを「万事頼む」と言われていたので、我が子勝太郎に先導させて、丹三郎を続かせ、自分が後に続いた。するとまもなく川越人足が踏み誤り、丹三郎は川にのみ込まれて沈んでいった。無事に式部親子は渡り終えたが、式部は勝太郎を呼び寄せ、「丹後から預かった丹三郎を死なせて我が子が生き残ったでは武士の面目が立たない。ただちに死んでくれ」と心を奮い立たせたので、息子勝太郎もひるまず、激流に飛び込みあひ果てた。息子を死なせた式部は世の中を無常至極と感じて、帰国後致仕し妻とともに出家した。丹後もまた式部親子の志に感動し、夫婦で出家し、式部夫婦とともに余生を仏道修行に専念したという。

式部は丹三郎の死に対し、「丹後手前、武士の一分立ち難し」として我が子に死を求め、我が子勝太郎も「流石侍の心根、少しもたむるところなく」、丹三郎に殉じたのである。繰り返しになるが、これぞ「義理」に生きた武士の鑑なのである。

さらに式部は、我が子を失った悲しみの中にあつて、「主命の道を背くの大事」と若君を無事に帰国させるといふ主命遂行に徹し、それも「面に世間を立てて」と何食わぬ顔で完遂するのである。この「面に世間を立てて」が功を奏したのか、若君は「若殿御機嫌良く御帰城」とご満悦の帰国を遂げるのである。

元々が、公務とは言え、若君の「東国夷が千島の風景御一覽の思し召し立ち」という気まぐれにつきあわされた主命であつた。式部は「横目役」という家中の武士を監視する役目の上、「年久しく」「この御家を治め」た「筋目正しき」武人であつただから、主君からの信頼も篤く、大過なく成し遂げる人物として格好の人選であつたのである。

しかし、その人選のために目の前で同僚の子が死に、我が子がそれに殉じるといふ憂き目にあつたのである。にもかかわらず彼らと同世代の若君だけが無事である。それも元は諫言を無視し、川越えを断行した若君の無謀な命令に

端を発しているのである。親としていかに辛かったであろうか。それでも若君も主君にも恨みを向けない。「内意は無常の只中を観念して」と世の無常に向けて忠勤に励んだのである。

これほどの家臣をもった幸せな主君は誰かと言えば、裏切りの「荒木村重」なのである。この設定には驚くしかない。

もつとも、この話を「荒木村重物語」などとは到底読めない。戦国期に優雅に「東国夷が千島」(ここで現在の北海道の千島列島かどうかは問題ではない)を遊覧したり、予定行程に「島田の宿」があつたり、「金谷の宿」や大井川の渡しに川越人足【挿絵Ⅱ】がいたり、旅装にその頃にはない「袖合羽」を着ていたり、まさにナンセンスである。また、いかな神崎式部も戦国時代の武人の様子がない。

その矛盾をこの章では、他の章では見られない書き出しをつけて正当化している。

人間定命の外、義理の死をする事、これ弓馬の家の習ひ。人皆魂に変わる事なく、只その時に至りて覚悟極むるに、見苦しからず。



〔挿絵Ⅱ〕

いかに神崎式部親子が「義理の死」に正々堂々と立ち向かったか、つまり、我が子は父の義理のために殉じ、父は我が子に殉じた死を求め、二人とも取り乱すことなく、覚悟の死を遂げたことを指しているのである。まさに「弓馬の家」の誉れである。

神崎式部は森岡丹後と友人関係ではなかったかも知れない。丹後が息子を式部に託した経緯が、「人も多きに、我を頼むとの一言、そのままに捨て難く」なのであった。つまり、「人も多きに」、わざわざ私を頼りにしてくれたという喜びが義理となったのである。だから、我が子の死を「まことに人間の義理ほど悲しきものはなし」と嘆息しているのである。公私の義理ではなく、「頼むとの一言」を義理として命より重く受け止めた神崎式部はやはり『武家義理物語』随一の武人なのである。

こんな武人は今はいない。その思いが最後の一文「その人も残らず、今又世にある人も残らず」という昔語りとなっているのであろう。

そうなるとうまます神崎式部ほどの武人が、「荒木村重」の家臣でなくてはならないのか、大いに謎は深まるばかりである。

ともあれ、家臣の誉れは主君の誉れ。敗将「荒木村重」は溢美されているのである。

#### 四、溢美される明智光秀

今更ながら明智光秀について紹介するまでもない。主君織田信長を裏切り、「本能寺」攻めて自刃させ、天下人になりながら、わずか十数日後、秀吉との山崎での戦いに破れ、再起を図って落ちのびる途中に、小栗栖で農民に殺され、悲運の最期を遂げている。

明智光秀を伝える資料は存外少ない。わずかに元禄時代に成立したとされる『明智軍記』や『綿考輯録(細川家記)』などがあげられる。明智光秀の人となりについては、歴史考証は先学に詳しい<sup>6)</sup>。また、なぜ、主君織田信長の忠実な家臣であり、軍団長クラスの人物であった明智光秀が突如謀反を起こしたかという原因や事情についての付度は今も尽きないが、ここではそれも問題としない。

今も昔も戦国時代を知る者も知らない者も、明智光秀が「敵は本能寺にあり」という言葉が伝わるように、天下布武目前の主君織田信長を裏切ったことは周知のことであった。つまり、裏切りの武人である。

にもかかわらず、西鶴は明智光秀を『武家義理物語』巻一の二「黒子は昔の面影」に誠の武人として登場させている。

明智光秀がまだ十兵衛と名乗り、ようやく後の大器の片鱗を見せ始めた頃、まだ独身の十兵衛を婿に求める人は多かったが、彼にはすでに言い交わした仲の女性がいた。それは近江沢山の何某の美人姉妹の姉にあたる人であったが、十一歳のときから言い交わし、十兵衛が武士として一人前になるのを待っていたのである。時もよしと、十兵衛から娘の親元へ迎え呼びたい旨の手紙を出したが、姉は疱瘡にかかり、直ったものの顔にその後がひどく残り、美人の顔を失ってしまった。ところが妹の方は同じ時期に疱瘡を患いながら、何の後遺症もなく回復していた。姉妹の両親は思案のあげく、十兵衛には相談せず隠密に妹を嫁がせることにした。ところが婚礼の夜、寢所の灯火に昔あった黒子がなくなっていることをとがめたため、妹は子細を話した。十兵衛は妹を親元に送り返し、言い交わした姉の方を送ることを願った。姉娘と十兵衛は仲むつまじく、夫唱婦随。しかもこの女は兵法にも詳しく、夫の武道の油断をささず、十兵衛も天下に知られる武将となった。【婚礼の場は挿絵Ⅲ】

この話の眼目である、明智光秀が美しい妹ではなく約束通り、醜い顔となった姉娘をもらいたいという決意を姉妹の両親に伝えた手紙では、



〔挿絵Ⅲ〕

（妹娘が）里帰りの時、段々状通に記し、「右もらひしは姉なれば、難病は世にある習ひ、たとへ昔の形はなくとも、是非に送らせ給へ。一命に懸けても夫婦願ひの所存。殊にこの度妹の心入れ、女ながら道理に詰まりける」

としている。美醜の外見にとらわれず姉娘を一個の女性として手厚く迎えようとする心、妹のとつた行為を責めるのではなく、「義理に詰まる」行為として称揚する態度。武士のぎりを守つた節義といい、明智光秀は裏切りの影などまったく感じさせない颯爽たる武人として描かれている。

さらにこの章の冒頭では若き日の明智光秀を「朝暮心ざし常の人には格別変はりて」「奉公に私なき事、自然と天理にかなひ」ほどなく弓大将になつたとするのである。「天理にかなひ」とは西鶴が人物評価に用いる最もすばらしい賛辞の一つといえよう。

その精動ぶりに加えて、この頃の光秀はいざというときの軍資金である具足金十両を備えた用意周到な武士であつたとして、

はや一国の大名にもなりぬべき願ひ、生れ付きての大气、その身の徳なり。

と絶賛しているのである。

歴史上の「明智光秀」は山崎の敗戦の後、主君信長を弑逆した大罪人として、その首を本能寺にさらされている。「武家義理物語」刊行と「本能寺の変」とではほぼ百年の時の流れがあるにしても、この西鶴の描き方は特異と言えよう。

敗将「明智光秀」もまた溢美されている武人なのである。

### 五、敗将溢美が黙許される可能性

『武家義理物語』刊行時期の翌年元禄二年九月の芭蕉真蹟懷紙に

將軍明知が貧のむかし、連歌会いとなみかねて、侘びはべれば、その妻ひそかに髪を切りて、会の料にそなふ。明知いみじくあはれがりて、「いで君、五十日のうちに輿にもおせん」と言ひて、やがて言ひけむやうになりぬとぞ。(7)

月さびよ明知が妻の話せむ

又女子妻にまいらす。

この逸話は路通編『俳諧勸進牒』などにも収められている。

伊勢の国又幻が宅へとどめられ侍るころ、その妻、男の心にひとしく、物ごとにもめやかに見えければ、旅の心をやすくし侍りぬ。彼の日向守の妻、髪を切りて席をまうけられし心ばせ、今更申し出でて、

月さびて明智が妻の咄しせむ（芭蕉庵小文庫・蕉翁句集）

この話は、まだ「明智光秀」が貧しい生活をしていた頃に連歌会を催すことになった。貧しい光秀は会を運営する費用がなく、諦めかけていたが、光秀の妻は、自らの髪を切つて金を工面したという内助の功のエピソードに感動した芭蕉の姿を伝えている。

芭蕉が懐紙を贈つた又幻ウツクシは、伊勢の神職で蕉門俳人の島崎味右衛門清集のこと。神職間の勢力争いに敗れ、この頃、貧窮の生活にあつた。芭蕉は貞亨五年二月の『笈の小文』の旅の折にも、『奥の細道』の旅を終えた伊勢の遷宮参詣の折りにも止宿しているが、貧しい中での又幻夫妻の暖かいもてなしに対し感銘し、「明智が妻の話」を書いて贈つたとされている。

「明智光秀」を顕彰するには、『武家義理物語』同様の夫唱婦隨を伝える逸話として意義は大きいが、だからといって、芭蕉も手放して明智光秀に賛辞を贈っているとまでは言い難いであろう。しかし、『武家義理物語』以外にも同時期に、しかも芭蕉ほどの人物が明智光秀を一人の武人として扱い、その妻に感銘を覚えていることには注目できる。

ただ、人々の間にも明智光秀の遺徳を慕う逸話が多い。特に幕末より明治にかけて著作された岡谷繁実『名将言行録』（明治二年刊）などは明智の武士団と光秀の絆に好意的な話を載せている<sup>(8)</sup>。また、明智光秀の追善供養という点では、旧領坂本の西教寺は明智一族の菩提寺として法要を続けてきたし、同じく光秀供養塔の立つ盛安寺では、未だ「本能寺の変」の頃を生き抜いた者が存命中に光秀没後五十年忌を営んでいる。また、高野山奥の院にも明智光秀の墓所は現存している。

江戸時代を前に明智光秀の一族郎党は僧籍にあつたもの以外は死に果てたわけであるが、細川ガラシャ夫人こと細川忠興夫人たまたが明智光秀の三女であることはよく知られていたことであろう。もつとも禁制のキリシタン信者で

あるから、今日こそ有名な細川ガラシャ夫人は賛美されなかったであろう。しかし、明智光秀を裏切ったといえるかも知れない盟友細川幽齋の家系に、皮肉にも明智の血が流れたことは西鶴の当時の人々も知るところではなかったであろうか。

また、明智光秀が最も信頼したとされる家臣、齋藤利三の娘ふくが三代將軍家光の乳母春日局であったことは何らかの形で体制側で有利に働いたのではあるまいか。つまり、徳川幕府という体制側が明智光秀の名譽回復まで行わなくても、庶民が明智光秀を主君殺しの不忠者として、完全な反逆者、悪役に仕立ててしまふことに憚りを感じたのではないかと考えるのである。結局、敗將明智光秀溢美を黙契する土壌があつたのではなからうか。

その論理で言えば、浅井氏の場合も同様である。浅井長政に嫁した織田信長の妹お市は、小谷落城の前に三人の娘とともに織田軍に降ってくる。その後、お市は織田家臣柴田勝家に再嫁するが、信長亡き後勝家が秀吉に敗れ、北ノ庄落城の折、自害して果てる。三姉妹は再び助けられ、その長女茶々は秀吉に嫁し、淀君として豊臣家と運命をとにもする。次女初は京極高次に嫁す。三女江は徳川二代將軍秀忠に嫁し、三代將軍家光や後水尾天皇の中宮和子の母として君臨するのである。和子が明正天皇を生むわけであるから、浅井氏の血筋は徳川家にも天皇家にも受け継がれていくわけである。やはり、浅井も織田との盟約を破り、朝倉と挟撃しようとした卑怯な家門という完全な烙印は押され難かつたのではあるまいか。敗將浅井家、浅井長政溢美を黙契していた可能性は高いのである。

荒木村重は前述したように謀反の武人ではあるが、秀吉に仕える茶人として復活している。もつとも、その事実を知る人々は少なかつたのではあるまいか。ちなみに荒木村重の嫡男村次は明智光秀の娘を妻にしていた。荒木村重謀反の噂に明智光秀が説論に行つたのも縁者であつたためである。だからといって、右の明智家の事情が功を奏したこゝとはなるまい。とはいえ、絶えた家系（絵師岩佐又兵衛は村重の子と伝えられるが）としての印象は強く、敗將荒木村



重溢美を黙契していた可能性は高いのである。

それでは、三人に敗將溢美の方法が用いられてもよいということとなるが、この三將に共通の問題点が残る。共に織田信長への反逆を起こしたという点である。

## 六、敗將たちと織田信長の関係

坂田吉雄は「戦国武士」について明智光秀の言を用いて、次のように述べられている<sup>(9)</sup>。

江村專齋の「老人雑話」の中に、「明智日向守が云う、仏のうそを方便と云い、武士のうそを武略と云う、百姓はかはゆきことなりと、明言也、」という言葉があるが、仏のうそが是認されていたと同じく、「武士のうそ」は戦国武士の間で肯定されていたのである。「上下万民に対し一言半句にても虚言を申すべからず、かりそめにも有のまゝたるべし、そらこと言つくれば、くせになりてせらるゝ也、人にやがてみかぎらるべし、人に糺され申しては一期の恥と心得べきなり」〔早雲寺殿廿一條〕といい、「仁不肖によらず、武者を心懸る者は第一うそをつかぬもの也、聊もうろんなることなく、不断律義を立て、物はぢを仕るが本にて候」〔朝倉宗滴記〕という様に、戦国武士の間で虚言が絶対的な恥として軽蔑されていたことに変わりはないのであるが、「武略」は「武士のうそ」であつて、ここで軽蔑された意味の「虚言」なのではなかつた。【旧字森田改訂】

この解釈によれば戦国武士にとつて、「武略」としての「武士のうそ」は許容されていたということになる。坂田氏はこの箇所の直前に「契約の破棄そのことに道徳的責任を感じられない」と述べておられるが、まさしく、浅井長政も荒木村重も明智光秀も後人が思うほど、反旗を翻すことに罪悪感はなかつたのかもしれない。

西鶴がもしその戦国武士の心を読み取つて『武家義理物語』の世界を構築したとすれば、逆に非難されるべき場合

は武士の「虚言」なのである。

だから、浅井家の姉川合戦の時の女は夫の「言いつけ」を守ったのである。榎木屋敷の長浜金蔵は怪異など心がけ次第と言った「人中の一言」に忠実に生きたのである。荒木家の神崎式部は同輩の「頼むとの一言」を義理として命より重く受け止めたのである。明智光秀は結婚を「言い交わした」ことを違えなかったのである。まさに武士である。

この真の武人たちに対して織田信長はいかな武人であったろうか。同じく、坂田吉雄は、織田信長については次のように述べられている<sup>10)</sup>。

器量の重視、人材の登用は、戦国時代に於ける最も注目すべき現象であり、人主の器量の有無は先ず人材登用の如何にか、わつていたが、此の点に於いて織田信長は、この時代を通じての最も勇敢な実行者であつた。このことは彼の侵略主義を成功に導き、逆にまた侵略主義の成功はこのことを容易ならしめた。家筋に煩わされることなく自己の器量一つで一郡・一国の領主に取立てられることが出来るということは、武士一般にとつて一つの大きな魅力であり感激であつた。そして、永年に互つて下剋上の風潮に支配されていた上方武士の間では、恩義の觀念を基礎とする主従關係への編成替えが極めて容易に実行されたのである。細川幽齋・池田惟政・明智光秀・荒木村重・高山右近等の有能な上方武士が信長によつて取立てられた。筋目の觀念が失われ、ば失われるだけ恩義の觀念が強調され、遂に恩義を重んずることが武士としての最高の道徳と考えられる様になつたのである。【旧字森田改訂。傍点は森田】

つまり、織田信長の合理思想による侵略主義は上方武士団にこそ受け入れられたのである。上方武士は伝統的な筋目の觀念と戦つてきた。それは王城の地に近いたためのコンプレックスであつたろうが上方戦国武士は下剋上によつてより大きくなつてきた。そんな手段を選ばない武人たちが、織田信長に「一郡・一国の領主に取立てられること」に

よって恩義の観念を持ち、主従の結束を生んだわけである。信長にとっても尾張・美濃以外に上方武士団を持つことによって、天下布武に近づいたのである。まるで『三国志』の魏の曹操が、一気に力をつけたのが青州軍を麾下においたことによるのと同様に、織田信長には上方武士団が必要だったのである。浅井長政も荒木村重も明智光秀も皆、下剋上で成り上がってきた上方武士である。立身出世のためには織田信長が必要だったのである。その織田信長という天下人を、そして天下そのものを西鶴はどのように認識していたか、続いて検証したい。

註(1) 『武家義理物語』が「敗者」の滅びの美学であるという趣旨は、「西鶴に見る義理と人情」(『義理と人情』中公新書 一九六九年刊)に詳しい。

(2) 『落日の美学―武家義理物語』の時間」『江戸文学』5」ぺりかん社 一九九〇年刊所収。

(3) 以下『国史大辞典 第一巻』吉川弘文館 一九七九年刊を参考にした。

(4) 小和田哲男『近江浅井氏の研究』清文堂出版 二〇〇五年刊。

(5) 以下注(3)と同じ。加えて資料として『伊丹資料叢書4 荒木村重史料』一九七八年刊を参考にした。

(6) 高柳光寿、日本歴史学会編『新装版明智光秀』吉川弘文館 一九八六年刊、土田将雄「細川藤孝と明智光秀」『明智軍記』

考』『上智大学国文学科紀要一号』(上智大学国文学科)一九八四年所収などを参考にした。

(7) 阿部正美『芭蕉伝記考説』明治書院 一九六一年刊。

(8) 『名将言行録』岩波文庫 一九四三年刊。

(9) 坂田吉雄『戦国武士』弘文堂 一九五二年刊。

(10) 注(9)と同じ。

※なお、テキストには新編日本古典文学全集『井原西鶴集』4(小学館)を使用した。

(もりた まさや・関西学院大学文学部教授)